
やりすぎの転生者

carzoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やりすぎの転生者

【コード】

N1860Y

【作者名】

carzoo

【あらすじ】

やりすぎた少年は、転生して、何をするのか。

プロローグ（前書き）

どうもデース。よろしくおねがいします

プロローグ

プロローグ

大嵐冬斗です。早速ですが、わたくし…死にました
頭イタイ人だとか思わないでください！マジです！マジなんです！
それでいま…

創造神と名乗るオツサンが土下座してます…

「どーすりゃいいのよ…」

俺は空を見上げる。

「ああー、空が白いなあー」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「うるせええええええつ！！！！！！」

「グハアツ！」

「さつきからごめんなさいごめんなさいうるせえよっ！！っーか何
で俺死んだんだよ！」

「オオツ！死んでおることを理解しておるのか！ならば話は早い！」

「イヤ、お主の死に方があまりにもかわいそうでのう」

「かわいいそう？」

「どんな死に方だったんだ？」

「ここは気になるところだ」

「わしが隕石当てたんじゃ」

「なに！？」

「なんてこったクソ野郎………」

「嘘だあああつ！」

「ぎ、残念ながら事実じゃ」

「は？。。。()はあ！？。()」

「ふざけんじゃねえ！このクソジジイイイイイ！！！」

「お、落ち着くのじゃー！」

「これが落ち着いていられるか！ゴラァ！」

「お詫びにチートな能力付けて好きな世界に行かせてやろう()コレで落ち着くか？」

「さっさとやれー！」

「うむ、分かればよい()すごい豹変ぶりじゃのう()それでは生きた

「い世界は何処じゃ？」

「ムフフ、こりゃもうめだかボックスしかないっしょ！」

「フムフム、めだかボックスか、よかるう」

「ヨッシャアア！」

「さつさと能力を決めてしまっしてくれ」

「ん、能力があ、別にめだかボックスだとなあ

「過去の設定、俺だけの異常と過負荷くれ」

「説明中、しばらくお待ちください」

「それってかなりチートじゃないかのう、しかもエグイシ」

「いいじゃん！どうせだから思いっきりチートにしたいんだよ！」

「フム、その気持ちは分からんでもないがのう。それで最後かの？」

「あとはそうだな、あ、そうだ！サッカーの設定残しといて。」

「よかるう」

「では、お主は箱庭学園の生徒で、住む所は箱庭学園から近いところにしておくからの」

「おう、サンキュー」

「ハア…、まあいい、それでは送るぞ。じゃあ〜」

俺の下の地面が無くなった

「おい！ちよつとまてえええ！！」

「箱庭学園の入学式の2日前じゃからの〜」

「このクソジジイイイイイ！次会ったらぜってーボコるからなあ
ああああああ………」

そして俺は意識を失った

「あっヤバ間違えて0歳からにした。まあいつか」

そんな神のふざけたこえがきこえたきがした。

プロローグ（後書き）

お初にお目にかかりますcarnzooと申しますこれからがんばりますのでよろしくお願い致します

主人公設定（前書き）

申し訳ない！間違いがあつて修正しました。 ×2

主人公設定

主人公設定

名前 おおあらしふゆと
大嵐冬斗

設定（めだかの世界、ほんとの世界は普通なため）

幼いころに箱庭総合病院にいき、球磨川、めだか、善吉に会うその後の診察中に黒服の男たちに連れられ病院の地下で人体解剖実験の実験体にさせられる、と同時に親に捨てられ一人暮らしを始める。

中学のころに安心院なじみに会い、球磨川と再開し、名前で呼び合う中に、古賀と名瀬は中学のころに車でひかれそうなところを助け好意を持たれている。本人は気づいてないなぜなら古賀と名瀬に会うのは言っていたが別に恋愛フラグを立てるなどいわれていないので神が勝手にやったから。あと、これも勝手にやったことだがいるんな人からもてる。サッカーが得意で大好き。中学のころ日本代表（現実でもそうだった）クラブチームに入っている（でも本編には出さない）
全員、記憶のプロテクトをかけ、解かないと思いつけないようになっている。

容姿

顔は上の上（前世から）

目は黒く髪は赤い

身長

168cm 体重56kg

性格

普通であって戦略的、基本的に人が嫌い。

能力

異常

1・

オールアルタイム
完全究極

思ったことを究極にこなす能力。主に人の能力を使うときに発動される。

例

相手の異常をコピーして自分の思ったものを付け足す

2・

ドリームオブドリーム
夢の夢

他の漫画の技や、自分で考えたことなどを確実にできるようにする

3・

ゴキettoエンペラー
神の皇帝

自分の身体能力を何倍にでも引き上げる能力ただし10倍を超えたらからだがこわれる

過負荷

1・

ゼロタイム
無の時間

全ての時間を操作する

2・

ペインドレイン
吸収苦痛

他人の痛みを吸収するさらにほかのものに痛みを操作して押し付けることが可能

3・

デスベラード
絶望

相手に黒い波動を放ち当たった相手は冬斗と自分の絶望の記憶と痛みを与える(後で発覚し、安心院に取られている)

初登校

初登校

なんだかんだで、俺は箱庭学園入学式の日を迎えた

神の阿呆が0歳から始めさせたせいで長時間がかかった。まあ能力慣れしたからいいけど

「ふああー、寝みー…」

ネットやら何やらであんまり寝てねーんだよなー

移動中

「おお！これが箱庭学園か！広いな」

ちなみに今はまだ早朝なので登校している生徒は少ない

今のうちに決められたクラスに行っちまおう、混むと面倒だし…

おれは一年一組か…まあこの世界に来てからまだ誰にも異常見せてないからなー（見せた奴は全員殺した）、当たり前か…ん？おお！あれは主人公の一人の人吉善吉じゃん！さっそくエンカウトとるぜ！

「おい！」
「ん？何か用か？」
「お前も一年一組か？」
「ああ、《も》ってことはお前もか？」
「おう、おれは大嵐冬斗だ、ヨロシク！えーと……お前は？」
「俺は人吉善吉だ。ヨロシクな」
「じゃあさっさと教室に行っちまおうぜ」
「そうだな」………

そして放課後

不良に絡まれた。

「おら、金出せや」
「嫌だね、かかってきたら？」
「なめてんじゃねー」

そういつて不良は飛び掛ってくる。毎度毎度、馬鹿な奴だ。

「無ゼロタイムの時間」

そういつて、相手の動きを止める。そして、日本刀を差して消えた。消える直前、不良がこんなことを言っていた。「化け物が」っとそれに答える。

「俺はなんの長所も無い普通で普通な《通常ノーマル》ですよ。ちょっとサッカー好きのね それじゃ、また今度」

翌日、近所で不良が死んだというニュースが流れていた。

第4話 生徒会選挙（前書き）

どもでございます。きょうはもう2、3話ごうしんします。

第4話 生徒会選挙

第4話

生徒会選挙

さて今週から生徒会選挙だ ん？時間飛んだって？

だって学園生活って毎日毎日同じようなことばっかなんだよ（主に不良殺し）

あ、途中から不知火入ってきたけどな

お！あれは！

「おい、善吉！何やってんだ？」

「見りゃわかんだろ、選挙活動だ！」

いや、見りゃわかるけどさ…

「じゃあお前、生徒会選挙出るんだ」

「ちげーよ、あいつの手伝いだ」

「あいつ？ああ、あの完璧超人か」

でもあのお嬢様と善吉ってどんな関係なんだ？

「ただの幼馴染だ。っち、前はもう一人いたのに……（ぼそ）」

「あゝ、不幸なことへえ、まあ頑張れよ。じゃあまた後で」

「おう、じゃあな」

そしてホームルーム前

……おいおい、いくらなんでも遅くねーか？もうすぐ先生来るぞ

ガラッ！

「冬斗！！俺まさか遅刻か！？」

「いや、ギリギリセーフだ「キーンカーンカーン」ほらな？」

「た、助かったあ」

「にしても遅かったななんかあったのか？」

「あのお嬢様の無茶ぶりに最後まで付き合ってたらかうなった」

「あー、それ以上言うななんとなく想像つくから」

大変だったんだろっなー

そして選挙結果発表当日

ん？またかなり時間飛んだって？だから学園生活って書くことないんだって

「それでは、生徒会選挙を発表します。生徒会長に当選したのは…

……

………支持率98%で1年13組の黒神めだかさんです」

まあそりゃそーだろー、だって

「貴様達の悩み事は私の所有物だ。ひとつ残らず私に貢げ！」だぜ？

クックック、今思い出してもおもしろー
っーことは明日は全校集会での演説か…、楽しみだなー

こうして生徒会選挙は終りを告げた。

あっちなみに今日も近所で不良の死体が発見された。

第4話 生徒会選挙（後書き）

さあ、どんどん行くぞ!!

原作？どうやって介入する？

原作？どうやって介入する？

さて、原作介入の仕方として現在思い描いているのは、風紀は味方、フラスコ傍観、過負荷は敵。
まあ、この方法で行けば、自分は、大いに楽しめるだろう。

時は変わり

あれはめだかと人吉じゃん。あの方角は剣道場だから……

めだかと人吉を尾行中

ガラッ

「あ？誰だアお前ら」

「1年13組生徒会執行部長職黒神めだかだ

目安箱への投書に基づき、生徒会を執行する！」

「あー聞いてんぜ！今をときめくイカれた新会長って奴だろ？

こんなところにお出でになるとは驚きだな！
支持率98%だか何だかしらねーが、生憎俺らは残り2%の方だ
ぜー！」

おいおい、アンタらもめだかの噂は聞いてるだろうに
なんでビビらねーんだ

すげーのか世間知らずなのかどっちだ？（今は物陰に隠れて傍観中）

「貴様がリーダーの門司3年生だな？」

剣道か、懐かしいぞ。私も昔少しだけかじったよ。

この木刀もよく手入れされておる。黒檀とは随分と張り込んだも
のだ」

「！？（え…あれ？いつの間に取られた！？感覚どころか気配もし
なかつたぞ！？）」

無刀取りって……かじった程度じゃできねーよ
もはや奥義だそれは、俺もできないことは無いが

「かつ囲め、おめーらー！！」

「おっおっ！！」

めだか相手じゃ囲んだって意味ねーよ。歯痒いな。

「……制服改造に染髪、装飾……」

校則違反のオンパレードだな

まあ、私もあまり人のことは言えんが」

確かにつてかめだかが着てるあの制服って制服改造で校則違反じゃ
ねーの？

あ、分身の術もどきだ

「なっ何イイイ！？」

「つか残像が見えるってどんだけ早いんだよ。どこかの、ポトさんもびつくりだぞ。（残像は生身の人間が出すことは不可能です）」

「それでもタバコだけは控えておけ。貴様達の健全な成長を阻害するし」

「何より将来の楽しみがなくなるぞ！」

「え…オレのタバコ！？」

「な…何だ今の！？」

「忍法か！？」

「……うん、「忍法か」といった君、君の眼は正常だ

あれは一般人の目には忍法にしか見えん？俺？俺は見えただぞ。しかもバツチりあの程度なら俺でもできる。動体視力は、たいタツのおにがスロ―で見える感じだ！」

「しかしまあ、荒れ放題だな

「よくもここまで学園施設を荒廃させはものだ
逆に感心したくなる」

生徒会長が感心してどーするよ

「なっなんだよセツキョーかよ！」

「お呼びじゃねーんだよ会長さんよお！」

「いい気になってんじゃねーぞコラァ！！」

剣道部の皆さんが、非難の声を上げるが、もう遅い。あれが出るぞ？

「哀れなことだ」

ほら来た。くくく…

「!？」

「貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている
何か重大な理由があつて挫折を経験し道を踏み外してしまったと
しか考えられん」

うわーお、相変わらずとてつもない勘違いぶりだな、おい

普通はそんな考え方できねーよ
さすが《上から目線性善説》誰にもまねできね〜。よくあんなのと
ずっと一緒にいるよな善吉。

「親に見捨てられたか？」

良き師に出会えなかったか？

友に裏切られたか？」

いつも思っけどなんでいちいちポーズとるんだ？なんかむかつく

「安心しろ、私が貴様達を更生させてやる！」

剣の事以外何も考えられないようにしてやる」

それって不味くね？精神科連れて行かれるぞ

「矯正してやる、強制してやる

改善してやる、改造してやる」

いや、強制と改造は絶対ダメだろ めだかつて時々危ない発言する

よな。(こいつが言える事ではない)

「二度とだらけようなどと考えぬよう泣いたり笑ったりできなくしてやる」

いやだから精神科連れて行かれるっての

「まずは素振り1000回からだ！
貴様達、今日は歩いて帰れると思うなよ！！」

「ギヤアアアアアアア……………」

不良達のご冥福をお祈り致しますアーメン(俺は、キリスト教じゃねエぞ)

数時間後

「も、もうだめだ」

「体がピクリとも動かねー」

「し、死ぬ」

ずっと見てたけどさー、あれはきついなんてもんじゃねーよ
よく生きてたなアイツら

「それで、いつまで隠れているつもりだ？大嵐同級生」

おーやっと出番か！目立ってやるわ。

「！！？ふ、冬斗！？」

「……………いつから気付いてたんだ……………？生徒会長」

「善吉と共にここに向かっているときから誰かに尾行されている気配はしていたまあ、半信半疑だったかな」

「へえ、じゃあ確信したのは？生徒会長。黒神めだかさん？」

「確信したのは門司3年生達のタバコを取った時だその時に貴様の姿が窓に映っていたからな。」

「さすが生徒会長、お見事ですじゃあ用も済んだし帰らせていただきますよ」

「さて、貴様の用とはなんだ？」

んー、なんて答えようかな ここはかつこよく……………

「今後、計画に支障が出ないかどうか確かめるためですかねイマのあなた方程度じゃあ障害にならないことが分かりました それじゃあまた」

「あーおいー！」

後ろでなんか言ってるけど聞こえないフリ

こうして原作介入1日目は終わった

今日は、不良に会わなかった。うち残念だ。

あれ？やりすぎた？（前書き）

主人公がやりすぎます。

あれ？やりすぎた？

あれ？やりすぎた？

剣道場

ドガッ バギッ グシャッ

只今日向君が剣道部相手に制裁という名の暴力を下しています
でもこれなら全国レベルだって言う不知火の情報も領けるな。俺の
ほうが強いけど。

「ったくよく、高校ではいい子ちゃんて通したかったんだけどナ」

「だ……誰だお前……？」

「僕？僕は真面目な一年生ですよ」

真面目なら暴力事件おこさねーけどな

「真面目に剣道がしたい、真面目で真面目な男です
だけど聞いてくださいよ！僕団体行動とか上下関係とか苦手です
てね

先輩とか顧問とかと揉めて、いっつもボコっちゃうんですよ。そ

れで試合出れねーの」

日向……………それはお前が悪い
つか我慢しろよ

「う……………それで、剣道部が休部中のこのガッコに来たってわけか」
いや部員一人じゃ試合とか出れねーだろ

「ピンポン！ここでなら一人で好きにできますからね
でも計算外、剣道場には招かれざる先客が！
そこで例のバケモン女こと生徒会長に草むしりをお願いしたんで
すけど」

うまく事が運ばねーもんすねー
あ、助けを期待してんなら無駄ですよ
あの女、今頃役員募集演説の真っ最中ですから」

残念ながらここに一人助ける人がいるんだよなー
まあ、俺だけど（笑）。やりすぎるけど（笑）

「しっかし、ここをキレーにしてくれたのは助かったかな？立つ鳥
跡を濁さずっスね」

うん、確かにキレーだ

「ま……………待てよ。勝手なこと吠えてんじゃねえよ！！
たった今思い出したわ
俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

それって本当なのかな

どうでもいいか

「俺も……」

「俺もだ……」

「俺なんか日本一の剣士目指してた……気がする」

気がするだけかよ!!

「……うつぜえ!

ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじやねーよ!

剣道三倍段って知ってつか!? 僕はあんたらの三倍強いつて意味だ!」

つく、俺としたことが感情を出しそうになった。つま、行くけど。

ガシッ!

俺が木刀を掴む

「もうそこら辺にしたら、日向君?」

「っ!? 邪魔すんじやねーよ!!」

日向が木刀を横なぎに振る

それを俺は某、超が口癖の学園都市の住民のオフエンスアーマー室素装甲で防ぐ

そして俺は日向の腹に神の皇帝で強化した蹴りをする

さらに日向が怯んだすきに回し蹴りを食らわせふっ飛ばす

「オイよく聞け日向、お前も暴力事件のこしてる時点でドロップアウトしてんだよ。だから……」

「っ!?!う、うるせえ!!」

お前、剣道三倍段って知ってつか!？」

ドガッ

俺が右足を日向に叩き込む

「しらねーよ!!カス!!」

「ぐ…が…ああ…」

さて、用も終わったし帰るか

そういえば、人吉来なかったな

まあいいか、面倒だし

「おい、お前…：…なんで俺らなんかのために…」

うーん…：…なんでって言われてもなー

原作介入したいからなんて言えないし

「ん?なんとなく、俺はただただ、ここに通りかかった箱庭学園の
イレギュラー
規格外だぜ。」

我ながらかつこいいこと言ったなー

このあと日向はめだかに更正されるんだったな

日向尾行しよ。っつーか歩けるんだ。

尾行中

「くっそ、大嵐の奴!あんなにつえーなんて聞いてねーぞ

なんで十一組チムトクタイじゃねーんだ!?!ってか、もう13組だろ!!」

だが、絶対にこのままじゃ済まさねえ！いつかギツタンギツタンにしてやるぜ！！」

「まあ、そんなに荒れるものではないぞ？日向同級生」

ああ、日向……どんまい……

「せつ生徒会長！？」

なななっなんでっ！役員募集会はどうしたんだよ！？」

「問題ない。ちゃんと代理を置いてきた」

不知火か……巻き込まれたな

「それで……また覗き見か？大嵐同級生」

「あちゃ〜、またばれちゃいましたか、こうなりゃ次からは奥のてっすね」

「ひいっ！おっ大嵐！？」

「ふむ、その怯え様だとこいつにきついお灸をすえたようだな」

「ええ、あなたの教え子の剣道少年たちを虐めていたので

じゃあ、部活に入っていないのでもう帰りますわ

あと日向……まあ……頑張れよアーメン」

俺は十字架を切る

「？」

そして俺は帰宅した。不良と言うかマフィア殺して。

「さて、貴様への話の続きだが」

「なっなんだよ！利用された仕返しでもする気かよ！！」

「利用も何も生徒会はご利用いただくためにある

これからも大いに活用してくれてよいぞ

貴様に会いにきたのは単なる別件だ

『「クラスメイトの日向君の性格が悪そうなので治してあげて」
だそうだ」

「しつ不知火イ！」

「哀れなことだ

貴様もかつては天使のように純朴な少年だったに決まっている

不幸にも愛情に恵まれなかったが故にそんな独善的な性格になっ
てしまったとしか考えられん

安心しろ！二度と悪だくみなどできないようこの私が徹底的に可
愛がってやる！！」

「（大嵐が言ってた頑張れってこのことだったのかアアアア！！）
ギヤアアアアアア……………」

その日男の悲鳴が町中に聞こえたという…………

「（日向、ドンマイ！）」

翌日

原作通りに剣道部は日向が指導を務めている

「べつ別に、あの女に言われたからじゃ……………」

………… ツンデレ乙

そして人吉も生徒会に入ったようだ

さーで、次に介入するのは…………

うーん、しばらくは普通の依頼ばっかだからな

となると……鍋島先輩の次期部長選びのところが
あそこで阿久根高貴が初登場なんだよな
よし！次はそこで介入しよう！
なぜか鍋島先輩に、目えこないだつけられたし！

あれ？やりすぎた？（後書き）

今日の質問

皆さんの好きな歌は何ですか？

第7話 阿久根VS冬斗

阿久根VS冬斗

やっと阿久根高貴初登場の日が来たよ

いやー長かった！

さて、柔道部の見学っていう形で行こう！うん、それで行こう！

鍋島先輩とも顔見知りだし大丈夫だよね……一回しか会ってないけど…

じゃあ行こうと

にしても柔道場でめだかに勝負挑もうかな？

でもなー、ここで勝つと要注意人物としてマークされそうだし…

どうしょ……。そうこうしている内に着いてしまった

俺が入っても気付かずに柔道を続けている

好都合だ、このままめだかと人吉が来るまで誰も気付くなよ…

「ん？おお、冬斗クンやん。久しぶりやね。」

気づかれたし！しかも覚えてたし！なんで覚えてんの！

覚えていると思っていた俺が言うのも何だけどさあ！

「お久しぶりですねそう言えば、鍋島先輩は柔道部の主将でしたね、
というかよく覚えてましたね」

「よく言っわ、まったく隙を見せなかったやん柔道部になんか用か
？」

「ええ、柔道界のプリンスいや、破壊臣と謳われる阿久根先輩を一
目見ようかね…」

そう…、かつて中学時代に破壊臣と言われ、球磨川の指示で黒神めだかを破壊するも、めだかがあまりにも抵抗せず阿久根の立場が悪くなり、人吉等に報復されそうになるが、めだかに救われてからは敬愛するようになる。俺から見たら嫌いな奴だ。俺は今回、その破壊臣の実力を見に来たのである
まあ、柔道の实力だけだな
お？人吉達が来たみたいだ

「じゃあ、ウチは用事があるからまた後でな」
「分かりました」

さて、見せてもらおうか？破壊臣の実力を

さて、阿久根先輩の実力を見に来た俺だが…

「ふん！相変わらずめだかさんの足を引っ張ることに精を出しているようだな！

だがいくら虫とはいえ君ももう高校生だ

大きな岩の下に潜んでいた虫の習性は分かるが、そろそろ独り立ちすべきじゃないのかい？」

「…独り立ちで来てねーのはどっちですか

何もできない？変な変態をめだかちゃんに近づけないくらいのことは出来ますよ？」

………何この空気？

ただだれくどくどぶちぶちいつてんだよ。むかつくな

そしてめだかは柔道部員相手に無双中……

やっぱ勝負挑んでみようかな？つま、まずは、この二人を片付けな
いと。

「おいおいお前らくどくどくどくど、馬鹿みたいに言い合いしてん
じゃねえよ。気持ちわりい」

「なんだい？君は、もしかしてその虫の仲間？」

「っは、ンなわきゃねえだろ。俺はただあんたらがうぜえからとめ
にきただけだ」

「冬斗、お前一体どうやったらいくと行くところにくるんだ？」

「つまいいじゃねえか別に」

「にしても、それに比べたら凡人のクセに天才に付き従バケモンつとうジブ
ンのほうがよっぽどスゴイヤんなあ？部活荒らしの人吉善吉くん？」

「へえ、最近噂の部活荒らしって人吉だったんだ　でも鍋島先輩、
人吉のことえらく気に入ってるようですね」

「（冬斗変わり身早！）」

「うん！人吉くん見たいながんぱり屋さんがうちはめっちゃ好きな
んよ」

「へえ、鍋島先輩って人よしみみたいな人がタイプなんですな
そうだ！阿久根先輩、人吉が会長のそばにいるのが気に入らない
のなら勝負したらどうですか？

人吉が勝てば今のまま生徒会にいて、阿久根先輩が勝てば人吉は
柔道部の次期主将になり、阿久根先輩は生徒会に入る、というのは
どうでしょう？阿久根先輩も人吉に実力があれば文句ないでしょ？

どうですか？鍋島先輩」

「うちはそれでかまへんよ」

「僕もそれに賛成だがハンデをあげよう

僕が十回取るまでに君が一本でも取れたら君の勝ちでいいよ」

「だそうだ人吉、頑張れよ」

「ええ！？これって拒否権はないのかよ」

「それじゃあ二人とも準備してきてください」

お、めだかが帰ってきた。どうやら終わったみたいだ
柔道部員たちは…ボロボロだな

「会長、お疲れ様です」

「ん？大嵐同級生かいや、そんなには疲れていない」

まあ、そりゃあそつだろうな

バケモン
天才だし

俺もだけど（笑）いや、俺は規格外か
準備ができたみたいだ

「それでは始め！」

ドンツ

は、早いな一本取られるの

「人吉君、君には何もできないというのは訂正しよう。

君のその努力と根性は認めよう

だが、それだけでは僕には勝てない」

その後も原作と同じく人吉は阿久根からは一本も取れず九本目まで
取られてしまった

「（人吉の気力が尽きかけてるな

ということは何だかの応援はそろそろか？）」

「人吉、私は如何なる場合においても決して私は貴様に勝てとは言
わない」

つてもなあ、これって本当に勝てるのか？

「だから勝って!!」

貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ困るぞ泣いちゃっぞ!

う、うわあ

これが黒神めだかの真骨頂その二、『ツンデレ』か……
生で見るのは初めてだが、ほんとにいつもとキャラが全然違うな
阿久根と鍋島先輩若干引いてんじゃねえかよ

「お前が泣いてるとこなんて見た事ねえし見たくもねえよ!」

ズドオンッ

人吉が双手刈りを決めて一本を取った
やっぱりここも原作と同じか…つまんね、俺が試合ぶち壊すんだっ
た。

「そろそろ俺は帰らせていただきます」

「あれ？柔道部には入らないんか？」

「はい、今回は生徒会と阿久根先輩の実力を見に來ただけですから」

「へえー、じゃあ勝負しようや」

「は？」

「おーい!阿久根くん!ここにいる冬斗くんが勝負したいそうなん
やけどええか」

「はあ!？」

「ええ、構いませんけど」

なんで阿久根もOKすんだよ!まさか、さっきの恨みか!

「じゃあ、柔道服に着替えてきてな」

何でこうなった！

「（ふふふ、実力見せてもらっつで？冬斗くん）」

準備終了

「それでは、阿久根高貴対大嵐冬斗の試合を始めます！お互いに、礼！」

「お願いします……」

「お願いします」

「それでは……始め！」

ここは無の時間ゼロタイムからの背負い投げでゴー！でいくか

パチンツ

と指を鳴らすそこで時間が止まる

俺は阿久根のそばに行つたところで時間を戻し腕を掴み一気に背負い投げで決める

ズドン！

「っ！？」

「なっ……！？」

「……！」

まあ、背負い投げつつつても、他人から見たらいつの間にか阿久根

が投げ飛ばされているとしか見えないだろう

「…審判」

「あ…こ、この試合、大嵐冬斗の勝ち！」

「ふー、じゃあ着替えて帰りますよ。本気出すんじゃなかった。」

「え、ちよ、ホンマに柔道部入らへん？」

「言ったでしょう、実力を見に來ただけだってじゃあ、さよなら」

その後、俺は帰宅した今日は10人殺した。

それぞれの心の声

（鍋島）

何なんや、あの新入生は！？

いくらなんでも出鱈目過ぎるで！？

柔道界で全国レベルの阿久根クンを瞬殺って有り得へんやろ！しかも阿久根クンのところへ行くまでのスピードが尋常じゃなかったやろ！。まるで時間を止めたような……

（人吉）

最初俺はアイツを、どこにでもいる普通の通常ノイマルだと思っていた

だが、剣道場でその気配にすら気付けなかったり、今阿久根先輩と勝負し瞬殺した実力を見ては通常ノイマルだとは信じられない

アイツはいったい何者なんだ？

それに、アイツが言ってた『計画』って何なんだ？

翌日、阿久根は生徒会に入ったようだ

さして、次はどう介入してくかな

今日は水中運動会の日だが、俺は体調不良で休みということになっている。

「なっている」というのは、本当は体調不良ではないからだ。なぜ嘘をついてまで休んだかというところと今日は楔と会うために休んだのである

今は楔が現在進行形で潰している学校に向かってるところだ。さーて、どこかな？楔は

まあ、こう探してはいるがそこら辺にはボルトで貫かれた生徒や先生がいるわけで

かなりグロッキーなわけだ

ん？何で俺は平気なのかって？

ふっふっふ、俺は中学時代こんなんばっかり見ていたのだ。

このくらいどうとゆうことはない

ドグシャ

たった今生徒をボルトで貫いた楔を発見

「久しぶり、楔」

楔が振り向く

「『君は誰？』」

「やっぱり記憶のプロテクトかかってるね。成功してよかったぜ、待てよ楔、今解くから」

そうして楔の記憶のプロテクトを解く。

「思い出したよ。久しぶりだね冬斗」

そう言つて、楔が近付いてくる
そして、

グシュッ

球磨川の持っていたボルトが俺の頭に突き刺さる

「あれ？死んじゃった？」

「誰が死んだって？」

俺が球磨川の後ろの現れる

ん？お前は死んだんじゃないかって？

はっはっは、あれは俺が夢の夢で見せた偽物さ

ドリームオブドリーム
「夢の夢かい？」

「ああ。そうだ。ちなみに、記憶プロテクトもそれでかけた」

「ふくん、まあいいや。近いうちにそっちに行くね？」

「また二人で暴れようぜ。じゃあな襦。また今度」

「うんじゃあね。冬斗」

そして俺は家に帰った

ちなみに、襦の最新電話番号とメールアドレス教えて貰った

喜界島もがなが生徒会に入った。テレレレッテレー。

櫻と冬斗（後書き）

球磨川さんは冬斗には、『』をつけません。

風紀委員と冬斗の力

現在俺は普通に学園生活を送っているのだが今日は風紀委員VS生徒会諸君らしい

まあ、原作見てるから知ってるけどね（笑）つまり、放課後までお役御免ということだ

いやー、楽しみだなあめだかの乱神モード

そして放課後

なぜか、俺が風紀委員の刺客に狙われていた。つで、携帯から着信。

「もしもし、大嵐か？そちらに風紀委員いないか？生徒会が狙われているらしい」

「会長さん？どういうことですか。俺あんたらの仲間じゃありませんよ？」

「話は後だ！今から助けに……」

「来なくていいです。俺一人で何とかかります。」

「そうか。ならば怪我をするなよ。」

「がんばりますわ。終わったら生徒会室に行くのでよろしく。」

「ああ。すまない」

ピッ。

つと電源を切る。そして目の前の相手に向き直る。

「あんがとさん、待っててくれて。」

「今から倒す相手には、多少気をつかってやらんとな」

「紳士だね。つま、俺の前じゃあ無力だけど。」

そう言つて、戦闘を開始する。男は、刀で正面からやってくる。それを俺は軽く避ける。

そこから、連続切りが来るが、全て紙一重で交わす。

「なあ、俺攻撃してもいいよな？」

「来るなら来い！」

「いいね、熱血嫌いじゃないよ。行くぞ、神の皇帝3倍」

そして懐から改造トンファーを出す。向こうは相変わらず剣で来るが、今回は、トンファーで剣をはじいて攻撃する。しかし、何か鋼鉄のようなもので守られ当たらない。続けて連続蹴りを食らわせるが、どこからか剣をもう一本繰り出し、切る。

ブッシャーー

つと、鮮血を撒いて倒れかけたのは男のほうだった。

「っ貴様何をした。」

「何もしてねえよ。したのは、俺が切られた痛みをあんたに変えただけだ」

そう。俺は苦痛吸収ペイントレインを使ったのだ。

「あんたには敬意を評して最強の技で終わらせてやる。」

そうやって俺が放ったのは、

「XBURNER」

刹那、炎が辺りを覆いつくした。男は死んだが、大嘔吐き（オールフィクション）でもとに戻しておいた。

生徒会室前

「そんなものをここで爆発させれば、貴様もただでは済まないぞ！」

「さーて、どうだろうな？」

え？ちよつと待てよ

確か雲仙が爆発させるのって炸裂弾だよな？

.....

オooooooooooooooooooooo!!!

ちよつと待てえ！

ちよつ！タンマ！善吉たち助けないと、え〜とあ〜そつだ！“インドレイン痛吸収”善吉たちの痛みを俺に！” 苦^ペ

ドooooooooooooo!!!

「風紀委員会の特服、スノーホワイト白虎のお蔭だ

これ着てればダンプにはねられても大丈夫だからな

八八八

連中は大方、爆風にでもやられたか？」

ガラッ

瓦礫の中からめだか達が出てきた

「アレだけの爆発の中で……ウソだろ」

「簡単なことだ

まず近くにあった花瓶の水をかけ不発するようにし

その後出来る限りのボールを部屋の外に蹴り飛ばした

だが私は爆発よりも爆風の方が危険だと思い、こやつらをロツカ
ーの中に入れた

だがそれだと誰かが外に出てロツカーの戸を閉めなければならない
それで私がロツカーの戸を閉めた訳だだが、何故善吉たちが怪我
をしてないかは分からん。」

「な!？」

「驚いてんじゃないやねえよ。雲仙先輩？俺が痛みを肩代わりしたんだ。」

そうやって俺が瓦礫の中から姿を現す。雲仙はおろか、めだかまで
驚いている

「ありがとう、大嵐同級生善吉たちを助けてくれたことに感謝する」

「たいした事はしてねえよ。俺は善吉を助けたんだ。周りはいいで
だよ。それよりはなしがあんのは雲仙てめえだ。何で俺に変な奴送
ってきた。倒したから後で部屋の前見ときな。」

そして俺は、その場に崩れた。

「流石はバケモノだな

だがそんな事をして俺を殴ることはできねーんだろ？

お前はすべての人間を救いたいって言ってたじゃねーか
ハハハハハハハ！

「……うるさい」

「ああ？」

「……哀れなことだ

貴様もかつては人間の生前を信仰する心優しき美少年だったに違
いない

情状酌量に値するだけのきっかけがあつて

そのような残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考えられん

しかし、だからと言って

私は貴様を許さない！！」

グオツ！

今回雲仙は最悪な敵を回してしまった。

怒り乱れる神（黒神めだか）を

「雲仙二年生、貴様の言う通りだ

私と貴様はそっくりだよ

私も貴様と同じで、自分を正しいと思ったことなど一度もない

もっといい方法はなかったか

ちゃんと他人の役に立てているか

起こりうるすべての可能性を考えたか

誰かの悲しみを見落としていないか

気付かぬ内に易きに流れていないか

人に助けることに慣れてしまつてはいないか

いつだって迷っているしいつだって怖い

私は正しくなんかない！

正しくあるうとしていただけだ！！」

「ハッ！どっちだって大して変わんねーだろうが！」

「貴様にはわからんだろうな雲仙二年生」

だが私は貴様ほど大層な信念など持ち合わせていない

少なくとも大切な人達を傷つけてまで貫く信念はない

「ケッ！

勝手に俺に俺を悪人みたいにしてんじゃねーぞボケ！！」

バラララララ

「まだ火薬玉を持っていたのか

貴様は私の聖者っぷりが気に入らないのだろうか？

ならばガツカリさせてやろう

私が怒りにまかせて人を傷つけるつまらない人間だと知れ！！」

ドガッ！

バキッ！

ドンッ！

めだかが雲仙を殴り飛ばした

たった三発のパンチがダンプよりも強いのかよ！！

だが雲仙も立ち上がり

「はあ…はあ…

俺は風紀委員の看板背負ってんだ

ここめだかをしょっ引かなけりゃ……

正義じゃねえ！！」

（。。。）

雲仙

「アンタは男、いや…漢だ
でも、度が過ぎてているぞ！でもかっけえええ。さっきまでの俺にし
たことチャラな」

雲仙はめだかに突っ込んでいった

ドガッ

やはりめだかに殴り飛ばされてしまった
だが…

グッ

「？」

「今お前を縛ってるのは鋼糸玉アリアドネ

いくらお前でも切れねーぞ

正しい正しくないとか言う前に正義は必ず勝つんだよ！！」

ゴゴゴゴゴゴ

？地響き？いやこれは…

「糸の方は頑丈でも校舎の方はそれほど頑丈ではなかったようだな」

「ま、まさか…」

めだかが校舎ごと引っ張っているのだ

「私は生徒会長だぞ？」

学校の一つや二つ、動かせんでどつする…!!」

ゴゴゴゴゴゴ

「皆、この件が終わったら

生徒会腕章を返してくれ」

そしてめだかは雲仙の前に立つ

「確かに戦いには負けたが勝負には負けてねーぞ」

「なに？」

「今でも俺は人間が大嫌いだからな

この信念は曲げるつもりはねーよ」

「ならば、私は人間が好きだ

この信念は貴様と同じく曲げるつもりはない」

「そうかよ…」

止めをさせ」

「分かった

止めを刺そう」

そしてめだかは雲仙に止めを刺そうとするが…

ガシッ

「離せ

貴様ら、巻き込まれたいのか？」

「そう、巻き込まれたいの」

「やり過ぎだぜめだかちゃん」

「何処までも付いて行きますから」

「（あのバケモノを一瞬で止めたこいつは一体…？）」

さて、そろそろ行きますか

そして、俺は帰って行った。

後日、理事長室で

「やはり大嵐君は異常アブノーマルを持っていますねえ

雲仙君がリタイアして、代わりに黒神君を入れようと思っ
ていましたが

大嵐君も入れたいですねえ」

「どっちにしても、あたしは気に入ってるよ？」

冬斗のこと」

「まあ、なんにせよ

後日、ここに来てもらいましょうか

私が実際に見て決めます

それでどうでしょうかね

袖ちゃん
「

冬斗の知らぬところで彼が巻き込まれようとしていた

嫌だよ面倒なのに

ちーす

みんな大好き冬斗です

今は理事長室に呼び出されてめだかと一緒に向かっているところですけどさー、こないだ生徒会助けたからさめだかがめっちゃフレンドリ
ーなんだよね〜

生徒会はいらないかとか、めだかと呼べとか。ハア、面倒だ。

そして理事長室

「いやはや、先日は大変立ったようですねえ」

「ええ、まあ、私もまだまだと言うことでしょう」

「さつさと本題に入ったらどうですか？俺達を呼び出したのは、そんな世間話をするためじゃないでしょう？」

「まあ、そう焦らずにあなた達はどうして天才がいますか
？」

「理事長、この世に天才などいませんいるのは努力家な人間です」

「俺はにんげんをみくだすためにつくられた、と思っっています」

「ふむ、考え方は人によって違いますねえでは次はこの6つのサイ
コロを振ってみて下さい」

そして俺達はサイコロを振る

めだかには原作と同じくサイコロが一行に積まれた状態になった
因みに俺はめだかの結果を見ながら振ったのでまだ見ていない
俺は…

ナニコレ？

サイコロが“外”の字をかたどって粉碎されている。

何でだよ

「これは興味深い結果がでましたねえ私は何故天才がいるのか？それを研究しているのですそして、人工的に天才を作ろうという計画があるのですその名もフラスコ計画」

「何が言いたいのですか？」

「君達にもフラスコ計画に加わって頂きたいのですよ実はさっきサイコロを振ってもらったのは異常であるかそうでないかを確かめる為なんです。ですが、これで分かりましたあなた達は明らかに異常何です！」

しかし、めだかは即答で、

「私は遠慮させていただきます私は天才や才能などに興味はありません」

「理事長、俺も面倒なんでパスで」

「つまりあなたも加わるつもりは無いと云うことですか」

「そうです」

「分かりましたもう退室して構いません」

「それでは、失礼します。行くぞ冬斗」

「すぐ行く黒神。そうそう理事長、言っておきますけど…ね！」

ドドドドス！

俺は、理事長に向かって、時雨　流のとある型を使用する。

「あまり人のことを嗅ぎまわらないでもらえますか？面倒なんで…」

レールガン
超電磁砲発動！

ヒョイ、ズガーン

「この十三組の十三人の皆さん、再起不能にしますよ？」

「！？（バカな！いくらなんでもでたらめ過ぎる！裏の六人がいなブラスシックスいとはいえ、この7人を一瞬で行動不能にさせるなど！）わ、分かりました君を詮索するのは止めましょう」

「物わかりがよくて助かりますでは、失礼します」

俺は帰りに環境保全活動（不良殺し）をしながら帰っていった。

「理事長、俺の“オートバイロケット反射神経”一でも動けなかったぞ

「ふう彼の力は強大過ぎますねえ私の手に収まりきるかどうか…」

フラスコ計画Ⅱ 傍観する。 同類語だから覚えとけ (前書き)

ただいま日本VSシリア戦見てま
ス

フラスコ計画Ⅱ 傍観する。同類語だから覚えとけ

今回の最初は生徒会の会議から

「さて、今日の議題は冬斗の件だ今回は雲仙二年生にも来てもらった」

「あいつは規格外過ぎる。あいつには風紀委員でも指折りの奴を送ったんだがそいつから聞くと一瞬で片付けやがったらしい。しかも変な炎で」

「しかも、雲仙二年生の炸裂弾による爆発でも無傷だったどころか、貴様らの痛みを肩代わりしたらしい」

「そんな馬鹿な！彼は一組ですよ？！めだかさん」

「何らかの方法を使ったと考えるしかあるまい。」

「あいつはお前らと敵対する気満々だぜ？」

「じゃあどうするんですか？」

「仕方あるまいひどく気は進まんが私の本気を思い出すためだ明日、兄貴を訪ねてみるとしよう」

「あの人のところ行くのかめだかちゃん」

「善吉、一緒に来てくれ」

「ああ、分かった。」

俺は今、学園内を散歩している。誰かが俺を噂している気がする

ん？何だこの無駄に大きい威圧感

「跪け（ヒザマズケ）」

この正に唯我独尊みたいな言い方は……

「ふむ、姿勢がいいなお前には王たる俺の配下になる素質がある」

都城王土

他人は俺の役に立つため生まれてきたと豪語する史上最大の俺様主義者。俺の大嫌いな野郎だ。

「噂通りの王様っぷりですね。都城先輩」

「誰だ？」

「唯のしがない規格外ですよ王様」

「そうかでは規格外よ跪け（ヒザマズケ）」

「夢の夢、ドリームオブドリーム幻想殺し（イマジンプレイカー）」

幻想殺しの幕を俺の周りに張り、言葉の重みを打ち消す。

「何か言いました？王様？」

「貴様、中々やるようだな」

都城は少し感心しているようだそりゃそうだろ今の俺は抵抗や踏ん張っていると言いつもりはない全くの自然体だ

「そりゃあどうも」

……ここに近づいてくる気配が一つ

めだかか

善吉が立ち上がろうと力を入れるが無駄だ
今のお前じゃあな

「おっと

革命を起こそうなんて思わない方がいいよ
都城王土の真骨頂『言葉の重み』
誰も王の命令には逆らえないんだからね」

行橋未造

彼、いや彼女の異常は受信感度

脳が活動する際に流れる電気信号が体外に漏れ出た電磁波を皮膚で受信することで人の考えを読むことができる

だが、感度が良すぎるため受信する情報の選択ができない
痛みや悲しみも感じてしまうのである

つまり、長所でもあり短所でもあるということだ

お、めだかが来たか

「め、めだかちゃん!」

「来たか…」

「都城三年生、善吉がだいぶお前に世話になったようだな」

「だったらどうする？」

「善吉を返してもらおう」

「ふん、そうかならば平伏せ『ヒレフセ』」

ドオオオオン

めだかが文字通り地面に平伏した

「くっ！」

「羨ましいな自分よりも上の存在がいるとは王たる俺にはない体験だ」

……なんと言う俺様主義。やっぱり俺こいつ嫌い

「俺はお前に惚れた一目惚れだ！」

「あっ……え……？」

そういう事を堂々というか？

めだかもう訳分かんなくなってるんじゃん

助け舟出すか

「あのー、いい雰囲気になってるとこ悪いんですけどそこら辺にしておけばどうですか？」

「ふん、まあ良かろう黒神めだか、異常おれたちの下に來い通常ノーマルなどに己が存在を消費するな。明日の日の出前、この学園の屋上に來い」

そう言って都城は去って行った

「全く、破廉恥極まる男がいたものだ不本意ながらこの逢い引きに応じ生徒会長として更正してやる必要があるな」

「それじゃあ俺はそろそろお暇させていただきますか」

「残念ながらそうはいかんぞ冬斗。貴様には聞きたいことが山ほどあるのだ。一緒に来てもらおうか？」

「嫌、めんどい」

「拒否権は無い」

「お願いだから許して」

「だったら来い」

そうなりますよねーでもここで捕まっただまるもんですか

「なら、力づくでも突破しますよ」

「やれるものならやってみるってんだ！冬斗！」

「あんまりでしゃばるのはよくねえぜ？善吉。“無の時間”（ゼロタイム）」

時間を止めて俺は返った。

家にて

「何でいんだよ」

ま、まさか俺の命を狩りに来たのか！？まずい！二二は……

「いや、全くの別件じゃ」

なんだよびつくりするだろー

「お主が勝手に勘違いしたんじゃろ」

「で、その要件って何？」

「実はな、お主をこの世界に送った後に分かったことなんじゃが、お主には生まれつき過負荷マイナスがあることが分かったんじゃ」

「マジですか？特典意外に？」

「マジもマジ、大マジじゃ」

「で？で？どんな能力なんだよ」

生まれつきということでおさら気になる

「うむ、それで能力じゃがはっきり言ってかなりエグいぞ

相手に痛みを与えるの能力じゃ相手の過去の傷とお主の過去の傷を一気に相手に波動として送るもんじゃ」

は？何それ？

「しかも入切が可能、強弱が調整、体の心か体が、どこに痛みを与えるかの選択ができる」

マジかよ

規格外な俺らしい過負荷マイナスだな

「つーことは名瀬の傷を開いてさらに俺の“あの傷”を与えることができるのか？」

「可能じゃ」

うわー

そして次の日

面白くない！原作どおり！今はあの伝説のシーン。俺は今“あの傷”のことについて調べている

「ごめんなさい」

「これにて一件落着ウ！」

“あの傷”に関してのダウンロードも終わった、さあて、そろそろ行きますか

「いやー、いいお話ですねえ」

「!?!」

「死闘を繰り広げた相手は改心し皆さん仲直りでめでたしめでたしでもこれで終わりますかね？」

最後に最強のラスボスが出てくるって物語では王道なんですよ」

「では、そのラスボスとやらは矢張り貴様か？冬斗」

「まさか、冗談は止せよ黒神の完成^{ジ・エンド}なんて、相手にしたくない。だから…」

俺は、あのタバコ神父の巨人を出す

「行け！魔女狩りの王！」
イノケンティウス

「ガアアアアアアア！」

イノケンティウスはめだか達の方へ向かっていく

「それじゃあ、頑張れ！」

「おい！待て！」

何か聞こえるけど気にしない

そして俺はエレベーターで負け犬組と裏の六人が戦闘中の階まで行く
プラスチック
そこでは球磨川が全員を螺子で串刺しにしていた

「久しぶりだな楔、いや、球磨川先輩って呼んだ方がいいか？」

「ううん、今まで通り楔でいいよ。だって僕たち友達じゃないか」

「ジョークだよ」

その頃めだか達は…

「くっとうすんだよめだかちゃん」

「慌てるな形がどうであろうと火だ。火は消火すればいい」

プシュー

めだかは近くにあった消火器をイノケンティウスに当てる

「ガアアアアア！？」

イノケンティウスはいきなりのことばで怯んだ

「（そろそろイノケンティウス消すか）」

イノケンティウスは只の火となり、やがて消えた

「いったい何だったんだ」

「分からんとにかく、地上に戻るぞ」

場所は戻って冬斗&球磨川

「来たな」

「？」

チーン

めだか達を乗せたエレベーターが到着したようだ。楔が口調を戻し、

「『久しぶりめだかちゃん僕だよ』」

「ツ！？球磨川！？」

そして、過負荷編マイナスが始まる

因みに過負荷マイナスの名前は絶望デスベラードにした

フランスコ計画Ⅱ 傍観する。 同類語だから覚えとけ (後書き)

日本2 - 1で勝った!!!!!!

後、少々テスト勉強しないといけないため更新をちよつとだけ止めます。(すいません)

マイナスの始まり。ってか！俺の過負荷とるな！なじみ！（前書き）

がんばって親の目をかいくぐりました。ちょっと雑かもです。

今回あとがきに重大発表が！！！！

マイナスの始まり。ってか！俺の過負荷とるな！なじみ！

俺と楔は理事長室に来ていた。

と言っても、俺は理事長室の外で球磨川が出てくるのを待っているのだが

「お？大嵐じゃんどこかしたの？おじいちゃんに用？」

不知火がやってきた

「俺じゃねえよ。俺の“友達”」

「へえ、友達？あんたが“友達”なんていうなんて珍しいね人吉？」

「まさか！俺はあいつらと敵対してんだぜ？俺あいつら嫌いだし」

「あー、そーだったねじゃあ大嵐の“友達”って誰なの？」

「ああ、転校して来たばっかの球磨川って奴ここに転校してくる前からの“友達”でさーだからなんだよ」

「ああ、なるほど、じゃあ人吉やお嬢様みたいな感じ？」

「お前が何で知ってるのかが気になるが、まあそんな感じで」

ガチャ

楔が出てきた

「ゴメンゴメンかなり待たせちゃったかな？」

「いや、別に。なあケーキ食いに行こうぜ、楔。ん？どうした楔」

「んー？たいしたことじゃあないんだけどさー冬斗」

「『ねえ？君どこかで会ったことあつたっけ？』」

基本、俺以外の人間と喋るときの楔は括弧をつける。

「何言ってますか？アタシとは初対面ですよそれに、ここはアタシの食事場です摘み食いすんじゃないよ？喰らうぞ！」

「『あーそうだよね僕と君は初対面だねこれからよろしくね不知火ちゃん』」

「だって不知火どうする？」

「あひゃひゃひゃひゃアタシこそよろしくお願いしますよ？球磨川先輩」

「『うん。』それじゃあ行こうか？冬斗。ケーキ食べに」

「ああ、じゃあな不知火」

そして俺たちは理事長室を後にした。

ケーキ食べに言ってる途中、

「あ、そうそう冬斗、君も・（マイナス）十三組に編入することになったから」

「めんど。マジかよ」

「まあいいじゃん」

つで、俺たちはケーキ（俺はチーズケーキとモンブラン）を食べて帰ったのだが、ちよつとまずいことになっている。なんせ

「何で安心院なじみ（チートババア）の『リストダンジョン教室』にいるのかな？」
「帰りたいな。」

「いいじゃないか。僕と冬斗の仲だろう？」

「おめえと親密な関係になった記憶はねえ！つで、何のようだなじみ」

「いやね、君の新しい過負荷マイナスがあるだろう？あれを僕に貸してくれないかな？」

「お前にやると えもんのガキ大将みたいに返ってこない可能性がある」

「君が本当に必要なときにちゃんと返すよ。それまで僕のスキルをレンタルさせてあげるからいいだろう？」

「こいつがここまで執着するのは珍しいな。今回は返ってきそうだし、まあいいか」

「分かったいいだろう。つで、俺に何をレンタルさしてくれるんだ？」

「ハートアイズ “心情観測”でどうだい？」

「分かった。いいだろうマジで返せよ？」

「分かってるつででは早速」

そうやってキスをしようとするなじみ。その頭を俺は引つつかみ

「おい、てめえ、“心の交換”ハートスワップでやれつて何回言ったらわかる？」

「ちえ、今回は許してくれると思っただけなのに、まあいいか」

そういつて、俺の“絶望”デスヘラードをなじみに“心情観測”ハートアイズを俺に交換して俺は目が覚めた

ちなみに“心情観測”とは相手の心を読んで好きに変えるスキルだ
(一度あの馬鹿はこれを使って俺をいじくろうとしたが、夢の夢で
追い払ってやった。)

- (マイナス)へのタイムリミットは刻一刻と近付いている。

マイナスの始まり。ってか！俺の過負荷とるな！なじみ！（後書き）

はい！あとがきです。

今回、この小説のタイトルを変更しようかな？なんて思ってるわけです！

つで、その小説のタイトルを皆さんで決めちゃってほしいのです新しい名前の募集は、今年いっぱいまでとさせていただきますので、どうかかっこいい名前の投票よろしくお願いします。後、このままでいいという方はこのままだと投票してください。（投票がない場合自分で考えた名前に変えさせていただきます）

なんか投げやりだとか文句があるお方は書いてください。10票、募集に関しての文句が出たら、その場で締め切り自分の考えた名前で変えようと思います。

まさかのフラグを建てちゃった？てか元から建ってんすけど（前書き）

今回も悩み事がございませう

まさかのフラグを建てちゃった？てか元から建ってんすけど

次の日

楔の言うとおり・（マイナス）十三組に編入していた

俺は勉強したいんだが……

いつの間にか軍艦塔ゴーストバベルに行き着いてしまった

たしかここでは名瀬つちと真黒がいたみを治療してるんだっとな

あ、江迎だ

そうなるとおの後はあの中に入って行くはずだ

実は江迎とは朝一度会っていて楔に紹介されているため普通に話したりする

「おい、江迎」

「ああ、冬斗さん何でしょうかあ？」

「教室探しか？」

「理事長が・（マイナス）十三組は教室がないから自分たちで用意しろって言ってたじゃないですかあ」

「ああ、たしかに言ってたな」

「だからここを・（マイナス）十三組の教室として頂こうかと思いましてえ」

「なるほどなーよし、俺も手伝おう。面白そうだ」

「そうですねえではお願いします」

「じゃあ行くぞ」

ガチャ

「初めましてえ

一年・（マイナス）十三組「虹色の薔薇」レインボーローズの江迎怒江と言います
・（マイナス）十三組は教室がまだ無いのでこの軍艦塔ゴーストバベルを問答無
用で明け渡してもらえますう？」

どこの中二だよ！うわ！恥ず！

「ならば僕も自己紹介しよう

僕の名は黒神真黒

ゴーストバベル
軍艦塔管理人にしてフラスコ計画元統括

かつては「理詰め魔法使い（チェックメイトマジシャン）」と
言われた男だ！」

お前ら二人とも中二の星になつとけ。

「理詰め魔法使い（チェックメイトマジシャン）ですか
いいですねえ

でも如何でしょう

レインボーローズ
虹色の薔薇ことこの江迎怒江に勝てますかねえ？」

「もういいわ！！！！！！！」

「これはこれは、問答無用と言いながら丁寧な自己紹介をありがと
う。さあ！君たちも高らかに名乗ってあげなさい！」

「い、嫌だ！そんな空気の中では絶対に名乗りたくない！！」

「苦労してんなー。あんな兄貴がいてさ俺なら日本刀で刺してるぜ
？」

「もう慣れた」

「そうか」

俺たちの目の前では理詰め魔法使い（チェックメイトマジシャン）

と虹色の薔薇レインボーローズが鬨っている。真黒の方はパンツ一丁で…。そして、真黒が追い詰められると…

「まったく、しゃーねーな、妹オレにもやらせろ」

名瀬つちが助けに入ったそうして鬨っている内に江迎が劣勢になっ
てきた

「二対一で鬨うなんて、根性腐ってんじゃないですかぁ？流石にこ
れでは不味いので逃げますねえ」

「おい！待て！」

「俺をおいてくな江迎!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドオン！

床を腐らせて穴をあけて逃げたようだ。俺は？

「くっ、逃げられたかそれにしても、これはめだかたちに知らせた
方がいいな」

「ホントですよー危険ですもんねー（棒）江迎、完全に俺のこと
わっすれてるし」

「！？そうか、君も居たんだったな。しかし何故…：そうか、知られ
ざる英雄か!?」

ミスターアンノウン

「だが何故君が使える！」

「その通り。俺も中二的に名乗りますか？」

俺の名前は嵐風冬斗。一年・13組の「殺意の道化師」キル・クラウンなんて呼
ばれてます。

二人は戦闘が得意ではなく、唯一の戦闘員は負傷していて闘えな
い。さあ、この絶対的ピンチをどう切り抜きますか？」

「ちっ！（万事休すかよどうすりゃいいんだ）」

そして、三人の中の一人が俺の前に立ち塞がる
そいつは…

いたみだった

「こ、古賀ちゃん!？」

「へえ…」

「名瀬ちゃん。私がこいつを足止めするから、名瀬ちゃんはその内に逃げて!」

「そんな…」

俺はいたみの前に立つといたみに殺気を当てる

「ひっ!？」

「おいおい、この量にも耐えられないのかよ。古賀?」

俺は心情観察でいたみに絶対勝てない。ハートフェイス必ず死ぬと言つ感情を植えつける。このスキル意外と便利。

「くろう…!」

「さあ、どうする?やれるもんならやってみな?」

そして俺はいたみに向けて手をのばす

「古賀ちゃん!」

いたみに対し俺は…

抱きついてみた

「合格」

「え？」

「まさか、あそこまで負の感情があったのに友のために引かないなんていい人間だ。古賀、おまえ墜ちて俺みたいになるんじゃないぞ？」

そして頭をナデナデする

「いやね、俺の方が身長高いからさ、撫でやすいからつい撫でちゃったんだよね。抱きついたのは中学のときの癖？」

「ふえ！？え、えと……／／／／」

「うん。いいもの見たし俺帰るね？」

某お姉さま大好きの特レポーターの特レポートでその場から離れる

「（な、なんだっただるでもなんか、心地よかったかな……／／／／懐かしい感じがして）」

「古賀ちゃん！大丈夫か！？」

「え？あ、うん大丈夫だよ」

「そうかあの野郎古賀ちゃんにいきなり抱きつきやがって」

「それにしても、何故彼は僕らを見逃してくれたんだろっか？とにかく、めだかちゃんたちの所に行こう」

「ああ、そうだな」

そして三人は生徒会室に向かった

俺？もちろんそのまま帰りましたよ？

まさかのフラグを建てちゃった？てか元から建ってんすけど（後書き）

私、活動報告で自己紹介しようかしまいか迷っております。書いた
ほうがいいのでしょうか？

後、名前も随時受付中です。

マイナスだけどプラスです

次の日

俺は楔と学園内を散策していた

「楔。 - マイナス 十三組の教室どうすんよ。」

「ん？とりあえずそこら辺の教室にするよ？冬斗。」

「うわ〜適当〜」

「いいじゃん別に」

するとそこへ人吉瞳が来た。

「！？」

「『あつ、人吉先生。会えて嬉しいなあだつて初恋の人ですもん。』

あ、そくだ！今からエロ本買いに行くんでよかつたら選ぶのに付き合ってくれませんか？』」

そう言つて楔は何処からか螺子を取り出す。あえて言おう。楔は、俺と他人では明らかに対応が違う。

「それはデートのお誘いかしら？」

「『んー、そうなりますねー』」

「残念だけど、今あなたのクラスの子が内の息子に色目つかしてんのよ。母親として見逃すわけにも行かないから、あなたには付き合えないわね」

「『そうなんですか。でも駄目ですよ人吉先生自分の息子の恋は応援しないと』」

江迎が一方的に迫ってるだけだけどな。楔は瞳に螺子を刺そうと走り出す。だがそれを瞳は小柄な体を活かして回避する。しばらくその繰り返しが続くあたりには多数の螺子が刺さっているという状況になった。そして瞳は俺を見て驚いた顔をして、それから確かめるように言った。

「君、自分の異常に……」気づいてますよ人吉先生。「……そう。」

このくだり来ると思った。これで二回目だぞまったく。

「じゃあ、何で彼と居るの？君は過負荷マイナスじゃないようだし、かといって異常並アブノーマルに性格がおかしいわけでもない。君のような完成した異常アブノーマルを体現したような人間が球磨川君のような桁外れの過負荷マイナスと一緒にいるのが分からないわ」

「ふむ、楔と一緒にいる理由ですか？決まっていますよ面白そうだからでしょう」

「面白そう？」

「そう、こいつと居ると退屈しない。人生は楽しく生きなきゃ損ですからね。特に俺みたいな人間は、それを嫌と言うほどわかってる。」

「

「へえー、冬斗は僕が面白人間だから一緒にいるってことなの？」

「まあ、そんなわけ無いじゃないか！なんてことは言わないけどな！お前の性格は結構気に入ってるしよ？マジでおめえと居ると楽

しいことばっかで逆に困るぐらいだし。」
「そう」

そして楔が瞳から目を離し、瞳はその隙を利用し善吉の下へと急いだ

「あーあ、振られちゃった。人吉先生、僕の初恋の人だったからシ
ヨックだなー」

「また会う機会だってあるだろう。初恋は叶わないってよく言うぜ
？」

「そうかな？」

その時

グジュ

「？江迎の野郎なんかしたな。一面倒（楽しい）なことが起こりそ
うだ」

ドゴオオオオン

校舎が一つ腐った。テレレレッテレー

「Omigga over. やってくれるぜ江迎」

「まあいいじゃない誰だって失敗はあるよ。僕は彼女のところに行
くけど君は？」

「ああ、俺はちよーっとだけ善吉Familyのとこ行ってくる」
「ん、分かった」

そう言つて俺は某死神さんの高速移動？で善吉親子のところへ移動した

「お疲れさまです！善吉、先生。」

「！！」

「おうおう、うちの同級生がやつちやつたみたいだね。善吉、先生今治しますよ。」

そして、瞳へ手を伸ばすが、

ドカッ

「！？」

「冬斗てめえ、お母さんに何する気だ！」

善吉が俺の腕を蹴った。まあ？痛くないけど？

「……何と言われても治療だけど？」

「そんなの信じられる訳ねえだろ！おめえは何がしてえのか分けてわかんねえんだよ！」

「いや、知るかよ。何で俺がお前らに行動基準決められなきゃなんねえの？俺は俺のやりてえようにやる。今は楔に付いたほうがいいと思つたから付いてるだけだ。てか、俺が怪我しそうな位強い蹴りだな？褒めてやんぞ俺には効かないんだが……」

「それが分けわかんねえんだよ！てか、効かないって何だ！」

「自分で蹴っておきながら気付かないのか？お前今まで蹴つた人に土下座して来い。人吉先生は気付いているようで善吉君に説明してあげて下さい。分かりやすく」

「善吉、あなたの蹴りは常人なら骨が折れている程の威力なのよ相

手が頑丈でも少なくともまともに決まれば痣ができて痛がる仕草をする程のね」

「それが如何かしたのかよ。お母さん」

「なのに、彼は痛がる仕草すら見せないどころか平然としている。」

「っ！？そういえば」

「大人しくしとけよ。別に、攻撃するわけじゃねえし」

俺は善吉親子？に触り、事象の拒絶で、怪我を治す。

「終了かな？」

「本当に治ってやがる！？」

「んじやな善吉。また今度ってか？」

今度は空間移動テレポートでその場から消える

「！？居なくなりやがった…」

「瞬間移動…まさかね」

「とにかく、めだかちゃんの所に急ごうぜ」

「ええ、そうね」

また校舎をつろつきまわっていたら突然！

ピリリリリ

「もしもし？何か用？」

「もしもし？ああ冬斗、もうすぐしたらマイナス十三組のホームルームを始めるから早く来てね」

「ラジャー」
「待つてるよ」

ちよつと小走りで移動する。たまには自分の足で歩かないとね！

そして、生徒会室では…

「それでは、マイナス十三組対策会議を始める」

「今、マイナス十三組は、全国から過負荷マイナスを持った生徒たちを呼び寄せているわ。そして、その中でも球磨川君を超えるかもしれない過負荷マイナスを持つ生徒までいる」

「そして、一番問題なのは…」

「大嵐…冬斗」

「ねえ、誰？その大嵐って」

「俺達の傷を治したあいつだよ。元々一組だったんだ」

「でもそんなに重要視するような人には思えないけど。元一組でしょ？」

「いや、冬斗は計り知れない戦闘能力を持っています」

「俺とめだかちゃんの二人掛かりでもいつの間にか居なくなつて捕まえられなかった」

「嘘……でしょ？」

「でも、おかしいとは思わないか？」

「何がです？阿久根先輩」

「彼の力だよ。アブノーマル異常なのか過負荷マイナスのかさえはつきりしてないんでしょう？」

「ああ、今分かつてるのはいきなり現れたり消えたり、炎を出して人を殺したり、痛みを肩代わりしたり、体があり得ないくらい固くなるってことだ」

「確かにあれは並のバケモンじゃねーぜ。あいつが前に来た時、俺

ですら身動きできねーほどの殺気出してやがった」

「そして、もつとも不可解な事は“人格”だ」

アブノーマル
マイナス

「球磨川君までとは言わないけど、異常や過負荷を持った子は、大なり小なり人格に影響がでるの。なのに彼の性格はどこにでも居るような普通の人格。例えるなら、大嵐冬斗というディスクに異常と過負荷マイナスを入れ込んだような感じね」

「善吉、冬斗とは一時期普通に話していたのだろう？その時は何かなかったのか？」

「いや、特に変わったところは無かった。演技だったっていう感じでもなかったぜ？めだかちゃんも知ってたんだろ」

「ああ、そうだな」

「やつぱり、ここは誰かに協力を求めた方がいいんじゃないでしょうか？」

「じゃあ、風紀委員会とかは？」

「それは雲仙二年生が戦線を離脱しているため、おそらく無理だろう」

「なら、鍋島先輩なら」

「……（うーん、でもあの人卑怯だからなー（ですしねー）（なんだよなー）（だしなー））」

「ふむ、ならば、日之影三年生を呼ぼう」

「あー、日之影先輩か。て言うかめだかちゃん、よく覚えてたな、あの人の事」

「誰ですか？その人」

「日之影空洞。第97代生徒会長、この箱庭学園を1年間守り抜き、知られざる英雄ミスターアンソウンと呼ばれなかった男だ！」

「日之影空洞……？」

「どんな人なんですか？」

「あー、なんつーか、お前らはもう知ってる筈なんだよ。でもその人は誰も気付けないほどにさり気ない。全校生徒はおるか前生徒会役員ですら見つけることは出来なかった」

キン クリ ゾン！

俺以外の参加者が携帯電話で参加している - 十三組ホームルームが始まった

「『ではこれより - 十三組のホームルームを始めたいと思います。司会進行は暫定的にこの僕、球磨川禊だよ。今日は早速だけど、新しいクラスメートを紹介するね

最近 - 十三組に入った。』」

「大嵐冬斗よろ。」

「はいはいはい。」

「『何？不知火ちゃん？』」

「大嵐つてどんな過負荷持ってたんの？」

「『確かに僕も知らないなあ。』」

俺も今気が付いたけど何で今まで聞かれなかったんだ？

まあそれは置いて：何を言えいいんだろつかそつだ！

「俺の過負荷マイナスは無ゼロタイムの時間とって、全ての時間を操作する能力ね？だから、腐らせたいんだつたら、時間を急激に早くするし、逆に戻してもいいってわけよ。」

まあ一つ言えば納得してくれんだろ。流石に

「うわーお、てことは大嵐敵にしたら大変なことになってたじゃん。アブノーマルアップノーマルってか異常みたいな過負荷マイナスだね。」

案の定

「まあそついう事だ。時間はいくらでも止められるし早められるし、これは、どつちかって言うところだからな。もちろん+も、もつてるぜ?」

「『それにしても、僕が心配なのは、めだかちゃんと日之影君が手を組んじやうことなんだよ』」

「そのことなら心配いりませんよ球磨川先輩」

「『ふうん。まあ、とにかく、十三組ホームルームを……』」

バキィ!

「ねー!あたしの言った通りでしょ球磨川先輩。2人が組むことなんてないつて。なにせその人一人で軍隊と戦えるんですから、あひやひや」

「『えーと、誰?』」

「元英雄だ」

いや、来るの早くねえかい?空洞さん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1860y/>

やりすぎの転生者

2011年12月10日23時50分発行